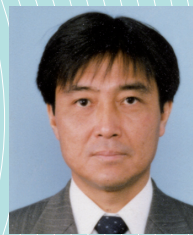


## 特集 自ら学ぶ力を育てる

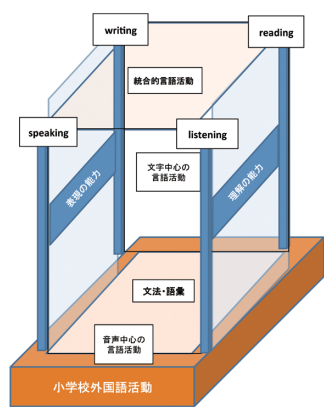
コミュニケーションへの意欲をどう持続させるか  
—小学校から中学校へ

重松 靖 (国分寺市立第三中学校)



## 素地から基礎へ

新しい学習指導要領では、小学校において「コミュニケーション能力の素地」を、中学校では「コミュニケーション能力の基礎」を養うとある。では、『素地』と『基礎』にはどのような違いがあるのだろうか。それぞれの学習指導要領の英訳版(文部科学省)を見ると、“To form the foundation of pupils’ communication abilities...”, “To develop students’ basic communication abilities...”



とある。家を建てることにたとえると、地ならしをし、家を建築するためにしっかりと地盤を固めることを『素地』, 「自ら学ぶ力・ことばを使う力・他とかわる力」を

土台としながら、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことという4本の通し柱をたて、文法や語彙という床、言語活動という壁や天井をつくり、「家」としての骨格を形づくるまでが『基礎』と言えるのではないだろうか。当然、柱は長すぎたり短すぎたりしてはいけない。床はしっかりとしたものでなければならないし、壁の厚さや強度も均一であるべきである。

NEW CROWN はこうしたバランスを意識し、生徒一人ひとりが意欲をもち、自ら学習できるよう編集されている。

## スムーズな移行

生徒がコミュニケーションへの意欲を持ち続けながら、「基礎」を身につけるためには小学校から中学校へのスムーズな移行を心がけなければならない。その際のキーワードは「わかる」「ふれあう」「気づく・考える」だろう。文法や語彙を無理なく、確実に習得し(わかり)、多くの人と実際にふれあいながら英語学習がコミュニケーションに欠かせないことばの学習であることを実感する。さらに、英語と日本語の違いや題材を通して様々な価値観・真理に気づき、人としての生き方について考えるのである。

## ① BOOK 1 Get Ready

NEW CROWN では、中学校の教科としての英語の学習にスムーズに入っていけるよう LESSON に入る前に、小学校外国語活動用教材『英語ノート』(文部科学省)に登場した表現や語彙を用いた Get Ready (1~4) を配置している。

Get Ready 1 「コミュニケーションを楽しもう」は、『英語ノート』で紹介された「あいさつ」「道案内」「買い物」「気持ちを伝える」「事実を伝える」などの場面や言語の働きを取り上げ、実際に話される英語を聞きながら、視覚を通して場面を考える活動である。生徒たちは、小学校で体験した英語表現を思い出し、イラストを見ながら英語が実際のコミュニケーションの手段として使われていることを実感することができる。また教師は、「どんな言い方をしていたかな?」「どんな単語が聞き取れたかな?」などと質問しながら、生徒がどの程度英語の表現や語彙を知っているのかを把握することができ、以後の指導方針を立てることに役立つはずである。

BOOK 1 Get Ready 1



Get Ready 2「友達になろう」は、  
*Paul: Hi. My name is Paul Green. I'm from the USA. I play baseball. Do you like baseball?*

のように、これから3年間生徒たちが一緒に学んでいく6人の登場人物の自己紹介を聞く。生徒にとって登場人物は、3年間自分の成長と重ね合わせることができる大変身近な存在になる。

内容としては、I like～. I play～. など、小学校の外国語活動で慣れ親しんだ表現や、「スポーツ」「食べ物・飲み物」「野菜、果物」「動物」など、自己表現に適した語彙を使用しているため、生徒たちは無理なく聞き取ることができ、聞いた内容をモデルにしながら実際に新しい友達とふれあう活動へと発展させることができる。教師側もこうした活動に実際に参加しながら、個々の生徒の到達度をより正確につかむことができる。

② We're Talking

Get Ready 1で紹介する場面や言語の働きは、各学年の各LESSONのあとに設けられているWe're Talkingでも取り上げ、実生活に結びついた場面での生き生きとしたやりとりを文字で提示するとともに、これだけは覚えてもらいたい表現をTalking Pointとして明示している。

たとえば、BOOK 1のWe're Talking 1ではカナダの中学校に引っ越した由香<sup>ゆか</sup>が出会いがしらに

隣に住む男の子とぶつかりそうになり、次の対話をする。

*Yuka: Oh, I'm sorry.*

*David: No problem. Are you new here?*

*Yuka: Yes, I am. I'm Yuka.*

*David: Hi, Yuka. I'm David. Please call me Dave.*

*Yuka: OK, Dave. Nice to meet you.*

ここで学習する言語の働きは「あいさつをする」「あやまる」であり、Talking PointはPlease call me Dave.である。SVOCの文はBOOK 3での学習範囲であるが、生き生きとしたやりとりをするために必要な表現であれば、それが未習であっても慣用表現として積極的に紹介している。もちろん、こうした表現は「言えればよい」ものであり、正確に書けることまで要求してはいけない。あくまでも表現を深めるためのものであることに留意したい。

ある調査によると、中学生が英語を学ぶ目的として、「テストで良い点がとりたい」や「高校入試があるから」という答えが多いという。英語はことばであり、コミュニケーションの手段であることを生徒たちに実感させ、自ら主体的に学ぶ意欲を育てるためにも「わかる、ふれ合う、気づく・考える」活動を進めたい。NEW CROWNはそうした活動が散りばめられた教科書である。

SPECIAL

TAKAHASHI SADACHI

MATSUZAWA SHINJI

IKEMO OSAMU

TANABE YUJI

SHIGEMATSU YASUSHI

MORI CHIZURU

TAJIMA HISAKO